

マルクスの本当の考え方を示そうとする意欲作

島崎 隆 (一橋大学)

有井行夫氏の『マルクスはいかに考えたか』(桜井書店、二〇一〇年)は、マルクスの『資本論』分析やそのための方法論・認識論を展開するといっているが、それは独特の先鋭的な思考法となっている。本書のタイトル「マルクスはいかに考えたか」は、実は本書が単なるマルクス経済学や『資本論』の解説や研究の書ではないことを物語るだろう。さりとして本書は、方法論としての、通例のエンゲルス風の「弁証法」をテーマとしたものでもない。著者はあえて、「弁証法」ということばを忌避している。通例、常識となって語られる『資本論』解釈や弁証法的方法論を突き破って、その根底にある、現実存在に肉薄するマルクス自身のダイナミックな考え方を、いわばマルクスになり代わって摘出しようという意図が、本書のこのタイトルに秘められているといえよう。

『資本論』といえば、労働価値説、搾取理論、階級対立の必然性などの達成を学ぶということになるが、だが著者は、そういう紋切り型の説明スタイルが、マルクス本来の思考を損なうというのだ。この点で、著者は従来の正統派マルクス主義(経済学)や弁証法的認識論などには大いに不満であり、その批判の詳細はあまり語られないが、本書の端々に、そうした批判は現れる。

実は本書はきわめて難解であり、マルクス経済学をある程度学んできており、ヘーゲルの哲学や弁証法については専門家であるはずの評者においても、理解困難な箇所がしばしば出現した。その難解さはあたかも、先鋭な概念分析が連続するあまり、それに対応する現実が多様に示されることがないかのごとくである。もっとも著者は、この概念分析こそが現実のエッセンスなのだといいたいようだ。それにしても、次々と溢れ出る、著者の論理的・概念的構想の豊かさには圧倒される思いがある。ところで評者は、以前、著者の『マルクスの社会システム理論』を拝読しておおいに勉強させていただいた。本書は、この著書の継承・発展である。

さて、本書の構成は、きわめて大雑把にいつてしまうと、第一章「神と国家と貨幣の批判」で、いわば問題提起風に、マルクスが終生格闘したこの三つのテーマに見られる物象化論を扱う。ここで、著者の問題意識の構えが明示されている。それを前提に、第二章「社会関係の批判」、第三章「自己意識から労働へ」、第四章「マルクスの唯物論と批判的社会認識の二段構え」というまとまりは、『経済学・哲学手稿』などを含めて、広く社会の

批判認識の方法論を展開するといっているようである。そして第五章「三つの社会システムと三つの主要ループと三つの歴史観」、第六章「商品の世界を否定して資本の世界が出現する」、第七章「神と国家と貨幣の止揚」は、『資本論』の具体的内容を展開しており、とくに第七章で、本書を総括して終える。大雑把にいうとそうなるのだが、「はじめに」の箇所では、「唯物論 (=存在主義)」「観察者の立場」「実証主義と制度主義の両面批判」「国家」「法律」「政治」「芸術」「科学は歴史をもたない」などから始まり、「神と国家と貨幣の止揚」まで、著者が本書で取り扱うキーワードが列挙されており、これらのものが本書の内容を実質的に構成することになる。

緊密な論理で展開された本書の豊かな内容をここで詳しく紹介・検討することはできないので、いくつか興味深い論点を取り出して述べたい。

第一に、本書の批判対象は何か。その基本は「実証主義」であり、さらに原子論的な社会契約説、全体論的な社会有機体説や制度主義、さらに法学的幻想の立場である。とくに強調される「実証主義」とは、「事実」の確実性に科学の正当性を依存させる考え方とされる。所与として絶対化される事実ほど、心もとないものはない。著者は、この事実にたいして、「存在」を対置するが、これはある意味、「批判された事実」のことであり、著者のいう「存在学」の立場は、労働する個人から発生するものとして、現実をとらえようとするものである。観察された個別的事実に依拠する立場は、著者によって、外部からの「観察者の立場」にすぎないといわれる。こうした認識法こそ、現実を批判的にとらえ返す、真の「弁証法」というものであろう。たしかに著者の問題提起にしたがって、弁証法は再確立されなければならないと実感した。

以上にすでに著者のスタンスがかいま見られるが、第二に、事実を説明するにあたって、マルクスは「(疎外された)労働する諸個人」から出発するべきだという。この労働する諸個人が社会システムの根底にあって、社会システムを不断に産出し、存立させている「本質的矛盾」である。この疎外された労働こそが、「私的で社会的なもの」である「私的所有」という「直接的矛盾」を生み出しているのであり、逆ではない。だが、この労働によって産出された、対立的社会実体である「私的所有」が、かえって労働の能動性をみずからの能動性へと転換する。ところで本来的な労働とは、自由な合目的媒介の活動であり、「労働する諸個人→手段としての自然と人間諸個人→目的」という推理的連結を形成する。実はマルクスのこの労働論は、ヘーゲルの自己意識論を批判的に改作したものであると、著者は指摘する。そして労働する諸個人は社会的存在として、社会の力を自己実

現の手段にしている。かつて私は、こうした対象認識法を、マルクスにそって「発生的叙述」、さらに「構造的発生」と呼んだ。

だが著者は、第三に、この労働という問題を社会のなかだけに閉じ込めず、さらに自然史的な発展というテーマのなかでも取り扱う。自然の歴史的発展の自己産出の最後に、その人間的局面が出現する。人間が労働のなかで自由に全自然を対象化することができるということは、自然史自身が人間において自己意識を獲得したということの意味するとされる。「私たちの自己意識は、とりもなおさず、自己運動する大自然の自己意識なのだ。」さらにいえば、人間は自己を社会と自然へと延長する存在であり、この意味で自然は、マルクスによれば、自己の「非有機的体」であり、こうした認識のなかに環境問題との関わりがあると、著者は強調する。こうした人間－自然関係の認識こそ、現代で、「エコロジー的マルクス主義」の出現を促した一要因といえよう。

第四に、著者は、ヘーゲル（とくに『精神現象学』）とマルクスが「批判的社会認識」のあり方として、「意識経験学」と「存在学」という二段構えの構想をもっていたと主張する。「存在学」という表現を含め、ヘーゲルとマルクスを重ねて見るというこの主張は、評者にとってややわかりづらかったものである。著者は、「事実」から出発するのではなく、この「存在」から出発すべきだという。たしかに、ヘーゲル『精神現象学』は学への入門として、「意識の経験の学」というタイトルをもっていたのは事実であり、その到達点から本来の学（論理学、自然哲学、精神哲学）が開始された。これ自身に問題はない。だが、これをマルクスに重ねると、「意識経験学」は「労働する諸個人」の立場を原理的に確定することになるという。そしてこの立場から、第二段は、現実を「労働する諸個人の諸姿態」とみなすことによって、「経済学批判」になるとされる。他者に向き合うヘーゲル的「自己意識」とマルクス的な「労働する個人」とが、果たしてうまく対応するのかわか、評者にはまだよくわからないので、文献に即した、もう少し丁寧な解釈がほしいと思う。

第五に、『資本論』のなかに実現されるという、「三つの社会システム」と「三つの主要ループ（円環）」という、著者独自のかなり大がかりな認識法についてである。おそらくこれが、『資本論』に流れる論理構造を独自に深く解釈するための道具立てなのであろう。詳細は述べられないが、三つの社会システムとは、「労働のシステム」「物象（商品、貨幣、資本）のシステム」「人格のシステム」である。そして、生命の論理がもつものとされるループの構造では、「疎外された労働」「商品」「自由な労働者」という三つのル

ープが中心となる。そのさい、前者は垂直的形態発生の性質をもち、後者は水平的形態発生であるという区別をもつ。この雄大な分析はなかなか魅力的であるが、著者も理論的に語るのがむずかしいといっているように、さらにわかりやすく説明してほしいと思う。

第六は、『資本論』第三部で展開される株式会社論についてであるが、ここでの著者の説明は注目すべきものを含むと思われる。著者は、このマルクスの考察が、現代のマルクス経済学に継承されていないと批判する。株式会社では資本の矛盾によって「所有と機能の分離」に至り、利子生み資本が成立するとともに、そこで資本家一般が貨幣資本家（株主）と機能資本家（社団）へ分離する。経営者は社団から分離し、管理労働者となる。株式会社という発展段階で、資本はみずからを不要にする。全生産過程を掌握するのは、労働者自身であるといえる…。

以上のようにして、著者による「私のマルクス」が展開された。そのほか疎外と物象化の関係、唯物論と観念論の区別など、お聞きしたいことがいくつかあった。いずれにせよ、多くのマルクス論が書かれている現在、著者のそれが、異彩を放っていることは疑いない。今度は、現代の資本主義の多様な事実に即して、著者の論理の有効性を展開することを期待したい。